様式２の１

記入日　２０２４年　９　月１８日
助成団体名：一般社団法人きぼう・未来・水俣

2023年度「水俣・熊本みらい基金」助成事業報告書

企画テーマ	水俣病を伝えるプログラム活動
取り組み実施期間または日時	2022 年 10 月～2023 年９月

【取り組み目的】

前史は、1998 年、「ほっとはうす」スタートから 20 数年前になる。「水俣病から宝物を伝えるプログラム」を、水俣市市内の小中学校の児童生徒、水俣病を学びに水俣に来られた大学生や研究者に継続して伝えていく活動を支えていく取り組み。このことは、水俣病により心身共に苦しみの体験をされてきた患者さん達ではあるが、人生のライフステージごとに「きぼう」を持ち続けてきた。

差別等の負の体験を伝えながらも、語りの間には決してあきらめなかった「きぼう」を語りさらに、「きぼう」の実現した姿を語る。この語りは、患者の人生の自己肯定につながる大切な生きがいとなる。

このプログラムを体験した人たち（児童・生徒・大学生・市民・研究者）は、イメージの中の悲惨なだけの水俣病から患者さんの人間としての豊かさ気づかされる。水俣病は公式確認から半世紀をとうに過ぎても、終わっていない現在進行形であり多大な課題がある今の水俣病に近づいてくれる。

【取り組み内容と成果】

水俣病を伝えるプログラム数は 35 回と熊本県の小学校訪問事業 11 回、学校やクラス単位の取り組みも多くあり 1,000 人以上の人達に伝えた。（小学生、大学生、市民、研究者、司法修習生等）

昨年度は長崎大に訪問して水俣病を伝えることができ、さらに、戦争の多大の犠牲を経験した長崎の地で、原爆による言葉で表すことができない膨大な被害の残酷さを学んだ。

今年度は水俣から遠く離れた、神奈川県横浜市で５年教科書の共通テーマである公害の授業を真正面から水俣病を中心に据えた教師に共感した。患者他共に事前事業をオンラインでしながら、直接、小学校を訪問した。患者さんの生身の姿から多くを学び取ってくれた。

患者の声を遮断してきたた環境省の姿が白日の下にさらけ出された本年５月１日。長年、患者を苦しめてきた認定制度の矛盾について、患者や支援者が声を上げ始めた。この動きの中で積極的に国会や、患者支援の集会に参加して粘り強い闘いを開始した。この動きは、当面続けて、今度こそ水俣病のすべての被害者が望む償いを求めていきたい。

【備考欄】

県の補助金等では支出ができない費目を貴団体よりの助成金で賄う予算とした。
水俣から東京への移動費用に充当した。
２０２３年度の決定金額が４５万円に合わせて当初の予算を変更し、自己資金に５万 2830 円を計上して収支報告書とした。